

杉並保健所における薬局DOTSの取り組みについて

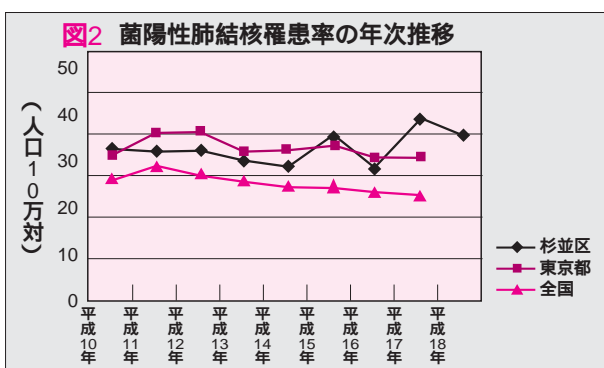
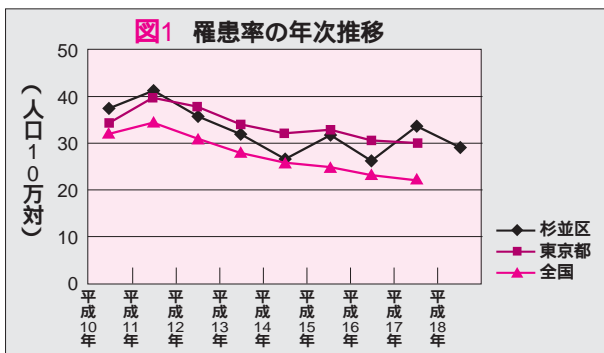
杉並保健所保健予防課
白川 久美子

はじめに

杉並区は、東京都23区の西部に位置する面積34.02平方km、人口約52万人の特別区で、住宅地が多くを占めている。

H18年結核新規登録者は181人（内、喀痰塗抹陽性者は68人）、年末登録患者数379名、罹患率29.3である。新規登録者と罹患率は増減がありながらも年々減少傾向にあるが、喀痰塗抹陽性者は横這いであり(図1,2)、若年層と高齢者層の発生率が高い。近年は、生活保護受給者や外国人登録者の増加という都市部の結核発生傾向がある。

また、区内には1保健所5保健センターが設置されているが、結核業務体制はH18年度より杉並保健所に集中化して行っている。本編ではH17年9月より当保健所で実施している薬局DOTSについて紹介したい。



地域DOTS・コホート評価開始から、薬局DOTSへの取り組み経過

- ・H14年度 コホート評価勉強会を実施し（結核予防会講師）、コホート検討会を開始。
- ・H15年度 保健センターDOTSを試行。

・H17年度 結核予防法改正による法25条規定の地域DOTS事業要領等を整備し、薬局・訪問看護DOTSを予算計上・事業化。

事業化にあたっては、杉並区薬剤師会および区内訪問看護ステーションとDOTS事業の講演会を実施し、事業周知と協力体制をとり、具体的方法の検討。

同年4月に薬局・訪問看護DOTS事業（個別契約方式）を開始。

杉並区の地域DOTSは、保健所、薬局、訪問看護ステーション、の3方法となる。

DOTS対象者の選定と実施方法

DOTS対象者は、喀痰塗抹陽性者、以外でも服薬支援の必要性のあるもの、である。DOTS判定会議を月2回実施し、リスクアセスメント票に基づきDOTS方法の検討・決定を行う。DOTS判定会メンバーは、保健予防課長、医務担当係長、保健師であり、また、結核予防会の医師にも協力参加を頂いている。

薬局DOTS利用者の分析と考察

H17年4月からH18年3月までの対象者は20名、14件の薬局を利用した。現在（平成19年4月）の状況は服薬完了8名、服薬中9名、脱落1名（理由：住所不定者）、転居2名（転居後DOTS継続）である。平均リスクアセスメントは17.6点である。DOTSタイプは、Aタイプ41.1%、Bタイプ58.9%であり（表1）、頻度は週2～6回が58.9%、週1回が29.4%、月2回が12.5%、（表2）である。

* 以下は脱落・転居を除いた17名の結果である。

表1 DOTSタイプ

Aタイプ	7名	41.1%
Bタイプ	10名	58.9%
Cタイプ	0名	0%
計	17名	100.0%

Aタイプ：治療中断リスクが高い患者（原則として毎日確認）
Bタイプ：定期的な服薬支援が必要な患者（週/1～2回程度確認）
Cタイプ：A、Bタイプ以外の患者（週/1～2回程度確認）

表2 DOTS頻度

2～6回/週 服薬・薬空包確認	10名	58.9%
1回/週 服薬・薬空確認包	5名	29.4%
2回/月 薬空包確認	2名	12.5%
1回/月 薬空包確認	0名	0%
計	17名	100.0%

患者の背景としては、こまめな服薬指導が必要である生活不安定者や服薬中断歴者、保健所への来所が困難な高齢者が多くを占めた(図3)。また、薬局DOTS利用理由としては「薬局が近隣である」「保健所の時間外対応が可能」「かかりつけ薬局がある」があり(表3)、薬局DOTSは様々な生活様式を持つ都市部住民の要望に添うものであり、またそれが服薬完了につながる事が伺える。

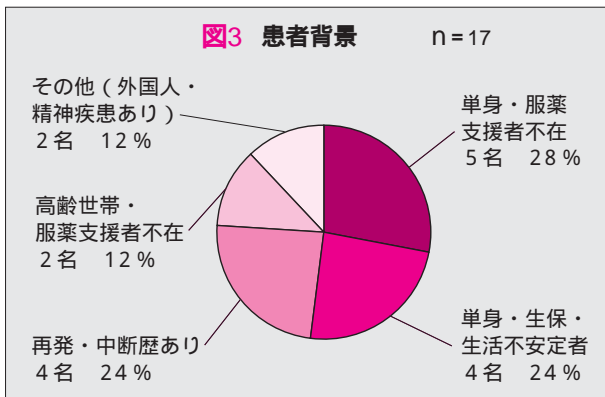


表3 薬局利用理由

薬局利用理由	人数	割合
保健師から勧められたため	7名	41.1%
薬局が近隣である	6名	35.3%
保健所時間外対応が出来る	2名	11.8%
かかりつけ薬局がある	2名	11.8%
計	17名	100.0%

薬局DOTSの具体的な流れとポイントについて

個別のケース支援の流れは次のようである。患者とDOTS方法相談時に近隣の薬局を選定 薬局に保健師が直接交渉 事業契約(事務担当者) DOTS開始 薬剤師よりFAXによる実績報告や必要時の双方のケース連絡・相談 服薬終了。

ポイントをケース支援から次のようにまとめた。事業開始時には地域薬剤師会との連携・協力を基本とし、区内薬局にDOTS事業の事前周知を図る。薬局には相談・服薬しやすいカウンター等と複数の薬剤師勤務体制があると望ましい。



薬局での服薬確認の様子

DOTS時間帯は、プライバシーや万が一の感染性を考慮し、来局者の少ない時間帯を設定する。担当薬剤師は可能なら固定とし、患者との信頼関係を築きやすくする。

保健師は薬剤師に任せきりにせず連携し、薬剤師、患者との信頼関係を築く。

まとめと今後の展望

薬局DOTSは、リスクアセスメントの高い結核患者を、本人の負担を軽減しながらも確実に服薬完了・治癒に向かわせる有効な方法である。薬局にはDOTS開始から終了まで熱心な協力を頂いている。また、薬剤師は男性も多く、また年齢の幅も広いので、患者にとって保健師と異なった有効な支援者となっている。今後、更に必要かつ有効な支援方法となるよう薬局・薬剤師会と連携しながら、患者本人のニーズにあった事業展開をしていきたい。

杉並区薬剤師会から

保健所からの要請があり、患者のKさん(単身・タクシー運転手)と話し合い後、H19年3月から薬局DOTSを行うことになりました。休業日(日・祝日)を除く毎日午前10時頃に来局頂き服薬を確認しています。Kさんは休職中で職場復帰の日を楽しみにしています。そのため治療にも積極的に取り組んでいます。単身のKさんは来局するようになるまで、殆んど対話がなかったそうで、短い時間ですが対話ができることも励みになっている様子です。Kさんがきちんと服薬完了(治癒)されることを願って対応しています。また、このような機会を通じて地域の方々の健康保持に少しでもお役に立てれば幸いです。

(杉並区薬剤師会副会長 入野 理)

杉並保健所予防課長から

日本版DOTSを推進していくためには、各地域の実情に応じた効果的な方法で地域DOTSを展開していかなければならない。大都市に特有の患者背景(住所不定者・外国人等)を有し、人口が密集する当区においても多様な服薬支援が求められている。今回の薬局DOTSはその一つの有効な選択肢として期待されている。特に、高齢者などでは複数の疾患を抱えているため何種類もの薬剤を服薬している患者が多い。薬剤師が服薬支援に加わることで、支援の質が高まるとともに、患者の療養において身近なかかりつけ薬局は、強力な相談相手になりうる。今後も一人でも多くの結核患者を治療完了に導けるよう、本事業を推進していきたい。

(保健予防課長 品川 靖子)